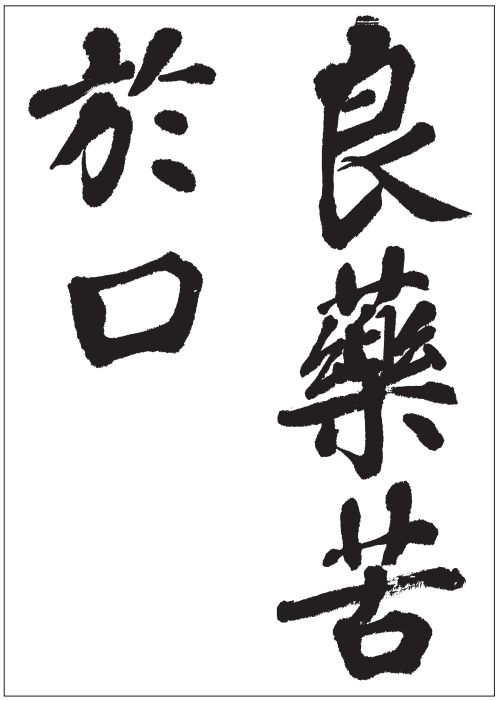
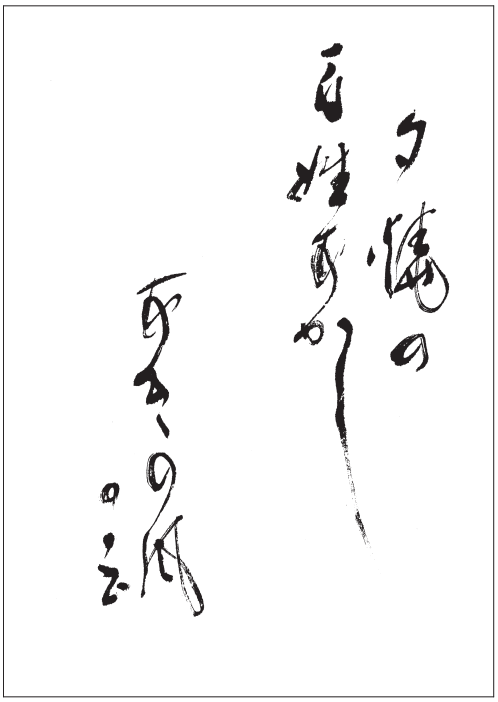
半　紙　課　題（予　告）　（十月二十二日締切）

平岡華雪先生書　良薬口に苦し（孔子家語）



訳…良い忠言は身のためになるが、聞くのがつらいというたとえ

平岡華雪先生書　夕焼の百姓赤し秋の風（許六）



一字書（九月二十二日締切）

課題

帰

(1)書体自由
(2)半紙タテ　※ヨコは中止
(3)落款は余白に調和を工夫し書き入れる
(4)出品料　四三〇円
(5)バーコード券貼付　太枠内の臨昇の隣の空欄に一字と記入　段級は無記入

レポート

第34回　榛陽会かな展　7月7日～10日

高崎シティギャラリー・第一展示室

平岡不二子先生・高橋香樹会長・越後夏子さんには、猛暑の中遠方よりお運び頂き、丁寧にご覧いただきまして厚く御礼申し上げます。特別コーナーでは、前回の郷土の歌人・土屋文明に続き、今回は「高崎の俳人・村上鬼城の俳句を書く」に挑戦しました。同規格の額（縦横自由）を壁一面に展示して来場者から好評を得る事ができました。会員一同次回展への励みになっています。

（武井春凌）

第69回 書道同文展

7月2日～7日 上野 東京都美術館

加藤 洞雪

書莚会でご活躍の皆さん今日は。書道同文展が七月二日から例年の通り東京都美術館で開催されました。書莚会会員の多くの方々がこの同文展に出品されています（事務局にお尋ねしたところ八割以上との事）。会場一室、まず書莚会会長髙橋香樹先生の作品。「月落ち鳥啼いて…」の誰もが知る詩が目に飛び込んでくる。力強く躍動感ある隷書。次々と展示されている役員の方々の作品は、ほとんど書莚会で活躍されている先生方です。同文新書では小暮菘華先生、水貝潮華先生、宮絢子先生、書き振りは異なるがそれぞれ主張があって見応え充分。新書を学ばれる後輩には貴重な参考作品となるでしょう。仮名部では、立川遊汀先生、北島菁丘先生、青柳香竹先生、石島柏美先生等の優麗にして典雅な書が示された。一方準会員受賞者の皆さんはそれぞれ自分の師が書莚会の指導者ですから学ばれた質も量も多く、それが作品に顕れ評価されたものと思います（全員が書莚会在籍者）。そしていつも思うのですが、松﨑桑雪先生、外川霞夕先生、戸張丘邨先生はじめ、役員の先生方の作品の題材の選び方に驚きます。誰もが何を書くかすごく悩みます。どれだけ引き出しがあって、どんな風に詰まっているのか、良く選んで取り上げ作品にしていると思います。書莚会は学びを実践する場、中身が濃く幅が広くよく詰っている書団体だと今回の展覧会を見て感じました。書莚会と同文会、車の輛輪の如く大きな力で、益々発展することを信じて報告を終わります。

第69回 書道同文展 受賞者名簿（書莚会関係）

＜準会員受賞者＞

文部科学大臣賞 町田 煌月

全日本書道連盟賞 清水 幸子

田中真洲賞 中澤 香林

＜会友・一般受賞者＞

大賞

漢字部 同文賞 梅林寺爽葉

仮名部 同文賞 ブリュール京子

読売新聞社賞 田中 真紀

準大賞

漢字部 勝間 凜華

仮名部 遠山 葉子

褒賞

漢字部 金子 裕香 楠 瑠奈

木村 金司

仮名部 森脇 正基

奨励賞（得点順）

漢字部 山口 青華 小森谷爽風

浜﨑 安代 中村 京翠

永倉喜久野 河野 芳羊

武川 青苑 大場 青扇

平松 青瑞 坂井 恵子

仮名部 赤嶺 子凰 羽塚 優子

中山 秀子 大垣ひで美

新人賞（最高得点者）

仮名部 羽塚 優子

公募賞

仮名部 大垣ひで美

会員昇格者

中澤 香林

準会員昇格者

勝間 凜華 金子 裕香

小森谷爽風 梅林寺爽葉

田中 真紀 遠山 葉子

ブリュール京子

会友昇格者

大垣ひで美 島津 玲子

羽塚 優子

注目の人と書
第三回　三輪田米山

髙橋香樹

書家には酒を好きな人が多い。古今の名家の作品にも酔筆と入れた落款を見かけるし、逸話も多い。

ここで紹介する米山も書と酒で有名である。

米山の作品集を上梓した浅海蘇山氏は序で「米山は酒により一切の意識から解放され、無碍の境地に立って筆をとったのである。独創を意識することもなく、ただ心の命ずるままに筆をとったとき、米山のいのちが書として現成したのである。」と述べている。

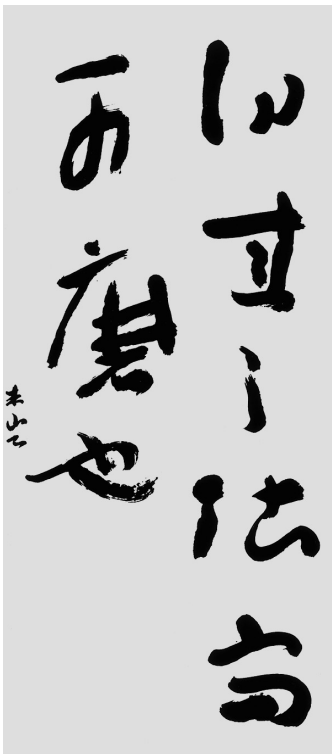
三輪田米山は、文政四年（一八二一）一月十日伊予国久米郡鷹ノ子村（現在は松山市大字鷹ノ子）に生まれ、幼名は秀雄、字は子廉といい、米山は号で、得正軒主人とも号した。

米山の書が語られるとき、必ず酒についても語られる。神官の家に生まれた米山は、書名が高まり、揮毫依頼者が多くなると、飲んでは書き、書いては飲むというような状態が続き、体調をくずすことも度々あった。そこで、「認物をするには酒を飲みたるよけれども、命にかへて認めねばならぬということはなし。古語に、『酒呑は醒て後悔』これなり。」と絶筆禁酒の札を幾度となく出すのであるが、ほとんどそれは数日も続かないのである。それ故、米山の作品は、松山市近郊に多数残されている。

「大雅堂は四歳にして能筆の名あり。我は十五歳にして、人並にもの書く事を得せず、漸く十七、八より手習はせしなり。」と。終生独学で学書の道を開拓している。米山は三十歳のときに、淳化閣帖にあった王羲之・王献之の書に接し、二王の気宇広大な書風にあこがれ、その行・草体の書法研究に精進した。更に年とともに楷書に興味を抱き、黄庭経・楽毅論・東方朔画賛・孝女曹娥碑を研究している。また鍾繇の薦季直表・宣示表もよく学び、豊満にして横へ広がる書風に変わっていった。

「自圭之玷尚可磨也」は七十歳代の作で、六曲一双屏風の内の一点である。簡潔にして、白の美が深く、豊潤な線で書かれており、この作は特に思い出深い。墨美社から米山の作品集が発売されるにあたり、パンフレットに内容見本として入っていた一葉がこれで、自室の天井に張り、毎夜眺めながら床に就くのが常であった。

「天照皇大神」は八十代初期の作。米山にとっては、神とは天照篁大神であり、天照皇大神は万物創生の神であり、絶対的存在であると信じて



自圭之玷尚可磨也

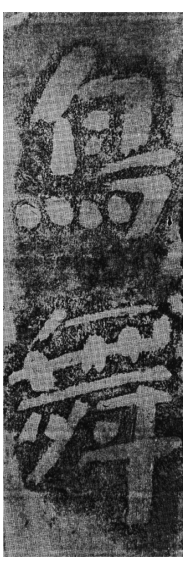
天照皇大神

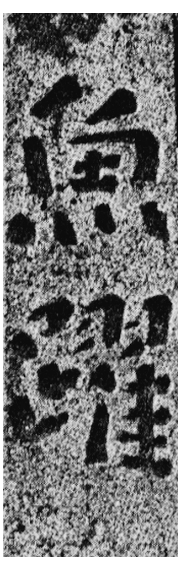
いた。その為か、八十歳代の作とは思えぬ程、気力充実して見事という他ない。「天」から「照」への動きと、「照」の最後の点から、「皇」・「大」の二画目への動きが相補い、峻厳の中にも変化のある作となっている。

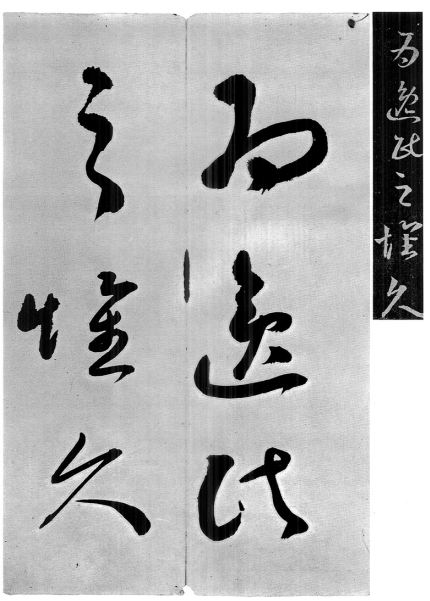
「無為」は、二折法による運筆を見れば、王羲之・鍾繇への傾倒なくしては考えられない作。この傾向の作としては、日尾八幡大神の注連石に彫られた「鳥舞」・「魚躍」がある。大学時代に松山に行き、米山研究家浅海蘇山先生のお宅にお伺いした。その時、米山の日記・作品等を拝見しながら米山の逸話や作品集を出す時の苦労話をお聞きした。その後、先生の御紹介で収蔵家の作品を拝見し、その足でこの日尾八幡大神に向い「鳥舞」・「魚躍」等の拓本を取った。

「爲逸民之懐久」は王羲之書十七帖の臨書である。この十七帖の臨書が墨美誌に特集され、米山を一層注目するきっかけとなった。この十七帖は、米山六十四歳の筆になるもので、王羲之の十七帖を前にして、それによりかかるのでもなければ縛られるものでもない。かといって十七帖を無視してわがままをしているのでもない。即かず離れず、自らを生かして十七帖をも生かさしめている。

米山は、書学半ばにして王羲之の書に接するや、たちまち書のあるべき方向に開眼、それを追求するために生涯をかけて精進した。王羲之の書の形骸にとどまることなく、その神髄を把握し、ついに個性豊かな書芸術を大成したのである。米山の鋭い直観力・古典学習の態度は、われわれに偉大な教訓を与えてくれる。





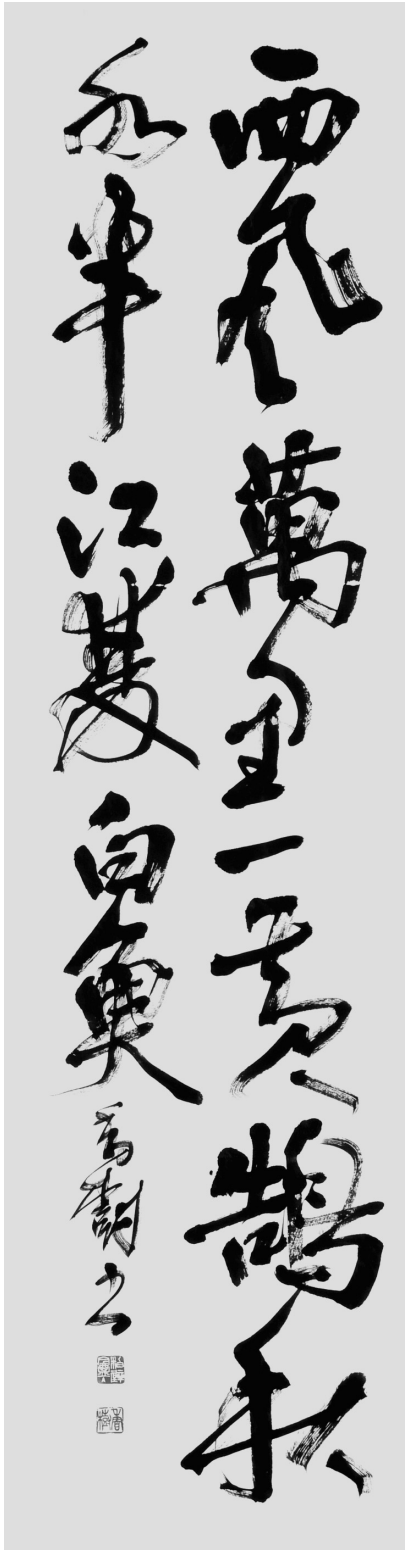


爲逸民之懐久

昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A

高橋香樹会長書



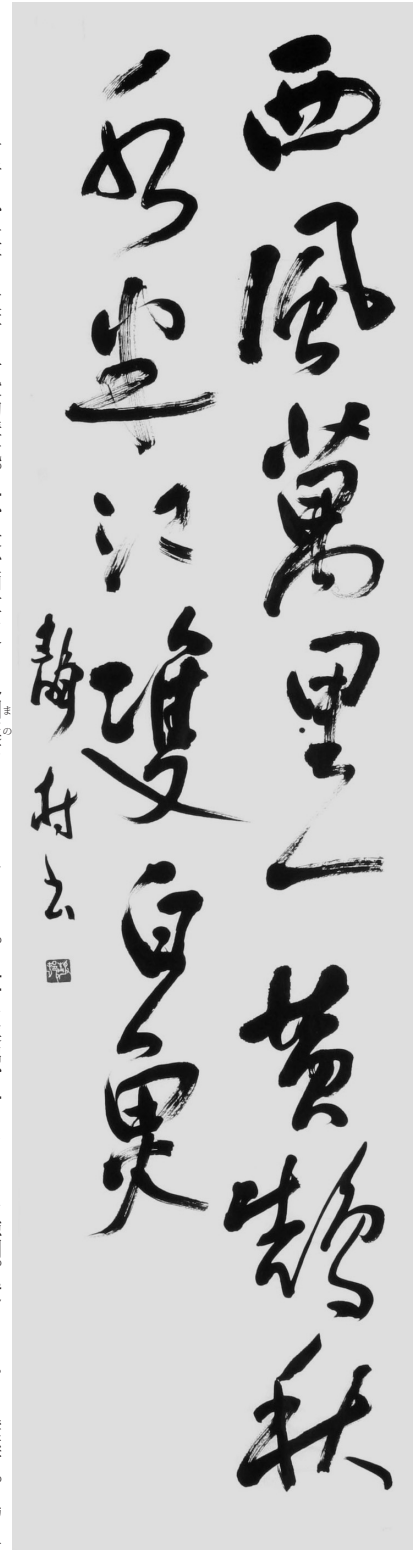
西風萬里一黄鵠　秋水半江雙白魚（張翔）

西風萬里一黄鵠　秋水半江雙白魚

行の流れ・変化には、文字形が長方・正方形だけにならぬよう工夫が必要。例えば、三角形・台形・菱形などを適宜に用い流れを表出したい。また、「半」のように縦画を長くするのもひとつの方法。連綿は無理のないものとする。二字連綿四ヶ所。「風」の草体には古典にこの形がある。墨継ぎは「鵠」と「江」。

B

鈴木静村先生書



右行8、左行6文字の一般的構成。一、最少画数を含め〝間延び〟にならぬように。里一を連綿、一　当たりを強調。黄　タップリ墨継ぎ。鵠　草体、旁細めて大きく、秋　偏を大に。左行　水半江　渇筆部分、カスレにも墨の出の工夫。雙　墨継ぎ上部大。魚　連火、文字通り〝火〟。

訳…秋風が吹いて遠くから一羽の黄色を帯びた白鳥が飛んでくる。秋の入り江の中流に二匹の白魚が泳いでいる。

予告（十月二十二日締切）　**紅葉暫新衰草路　菊花能界白雲郷（屈復）**

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

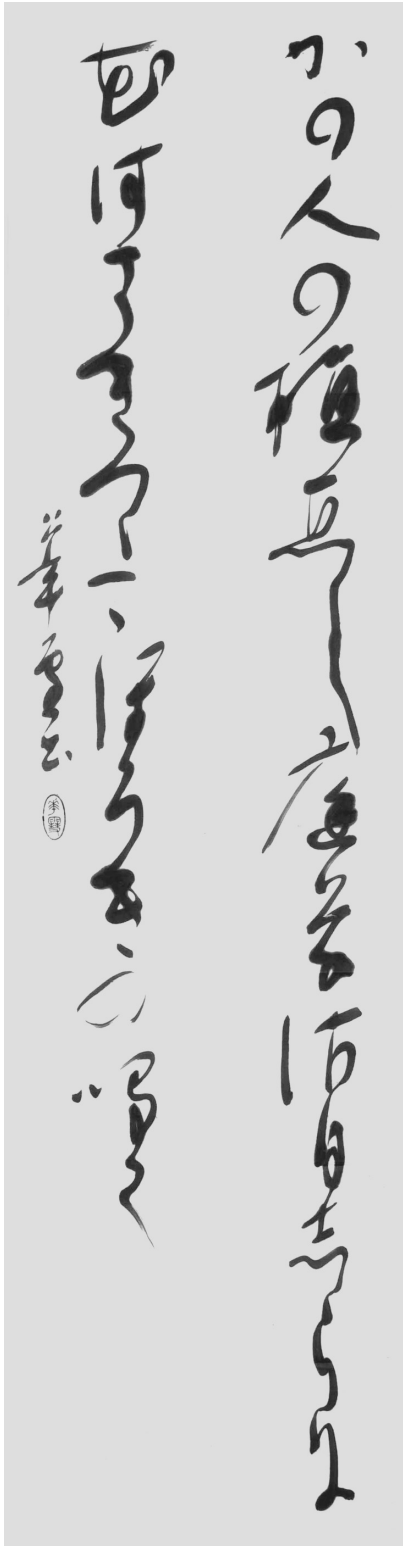
昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

A

平岡華雪先生書

かの人の植ゑし庭草さびしらに花は咲きつつこほろぎの鳴く（伊藤左千夫）

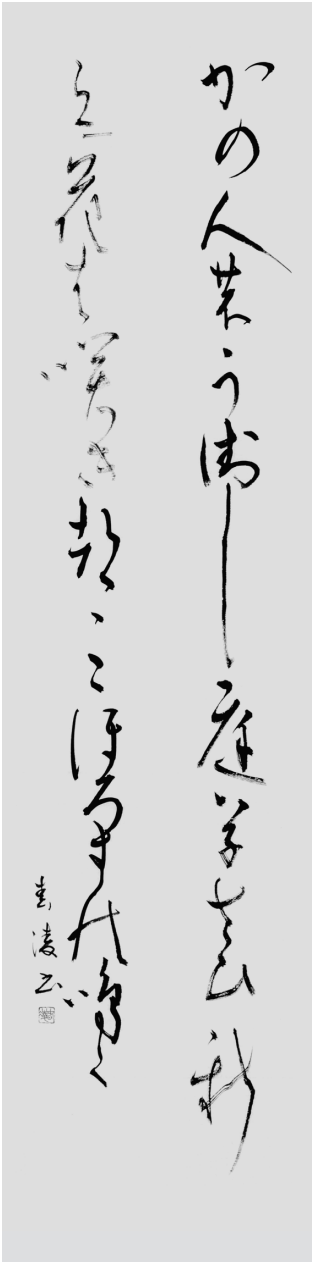
かの人の植恵し庭草佐日志ら尓花はさきつゝこほろきの鳴久



B

武井春凌先生書

かの人農う衛し庭草さひ新ら二花者咲き都、こほろ支能鳴久



伊藤左千夫

（一八六四～一九一三）

千葉県生まれ。本名幸次郎。一八八五（明治一八）上京。乳牛牧舎で働いたのち、牛乳搾取業を開業する。三十歳の頃から「万葉集」に親しみ、歌会などに出席。一九〇〇年、正岡子規を訪ねその門人となる。子規の短歌革新の業は左千夫によって達成されたと言われる。歌人・小説家。代表作「野菊之墓」。

学び方

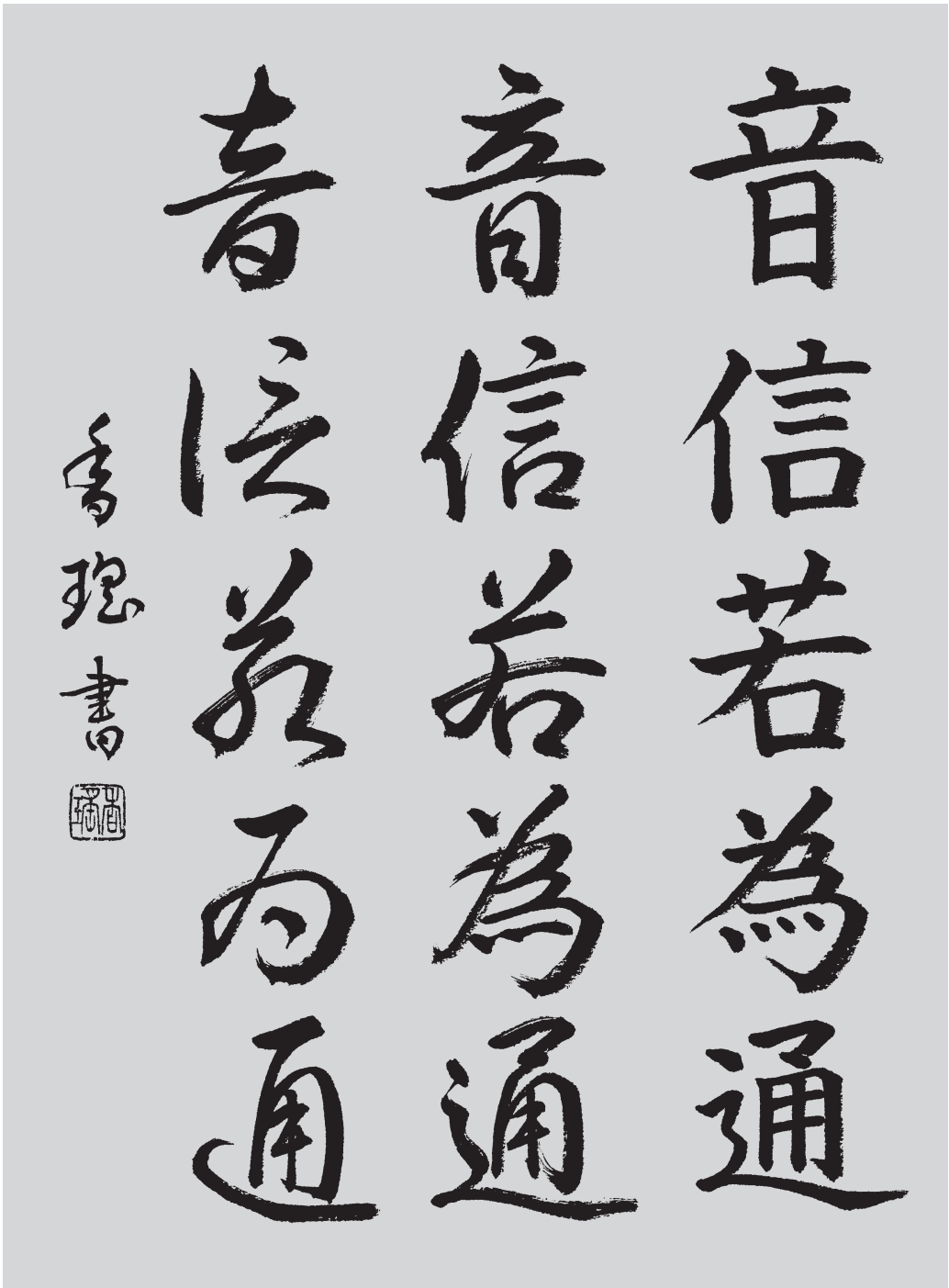
基本的な二行書にしました。墨の対比を考慮し一行目と二行目の照応に重点を置きました。「の」が三回あるので「の」「農」「能」と変えています。「植ゑし」は「う衛し」と字幅を変化させ、二行目の書き出しから「咲き」まで渇筆にして、「こほろ支能鳴く」で墨を入れ、墨色を変化させました。

予告（十月二十二日締切）　吹くからに秋の草木のしをるればうむ（む）べ山風をあらしといふらむ（古今和歌集）

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）

内藤香瑶先生書



音信若爲通（王維）
音信（いんしん）　若為（いかん）ぞ通（つう）ぜんや。

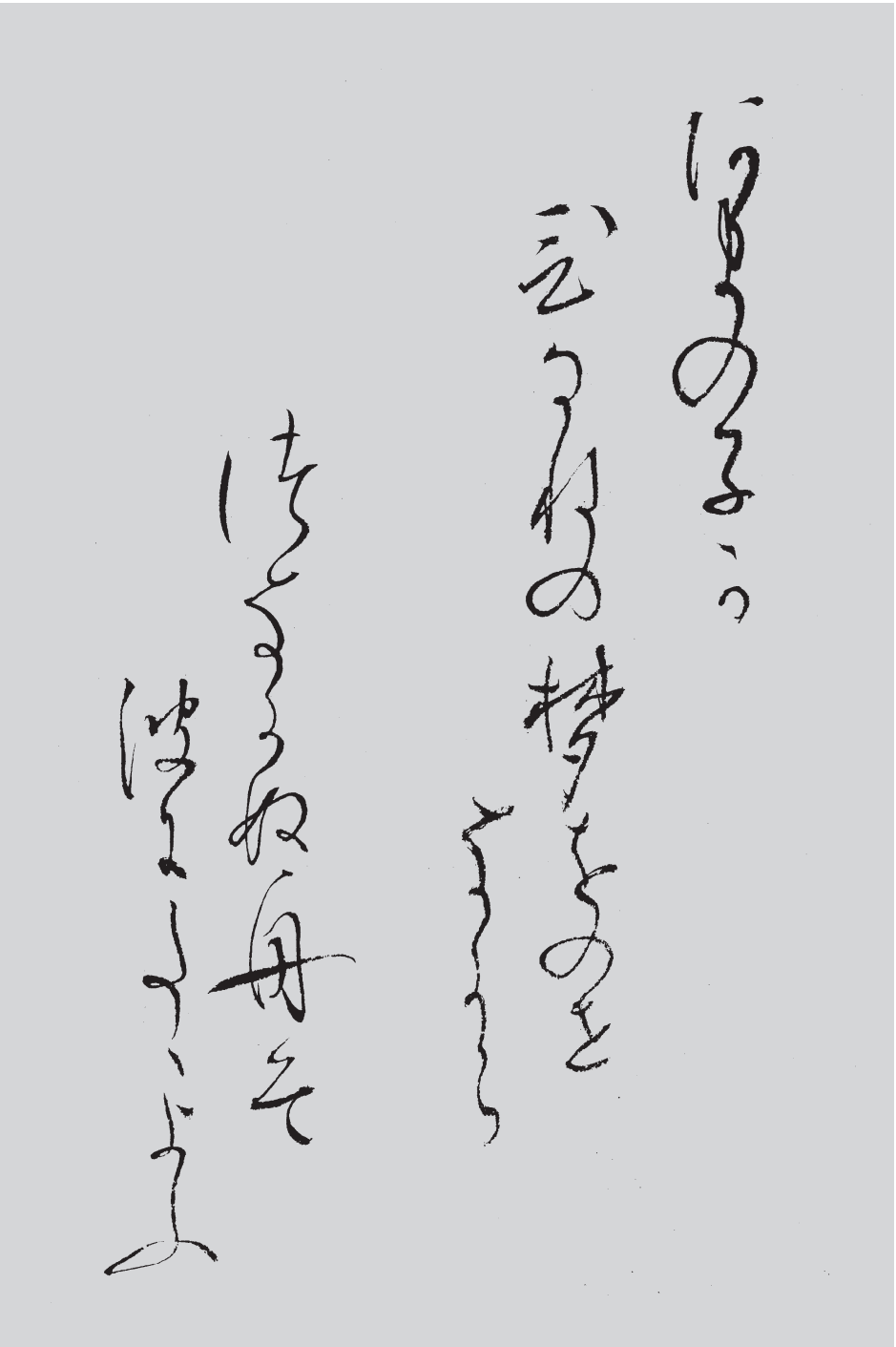
訳…音信はどうして通じたらよいのだろう。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）

高塚竹堂先生書

海人の子がひるねの夢を乗せながらつながぬ舟ぞなみにただよふ（八田知紀）



※左余白に落款「〇〇書」と調和を工夫し書き入れる。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

白雲幽石を抱く（謝霊運）

訳…白い雲がおくぶかい岩にかかっている。

〈各字ポイント〉

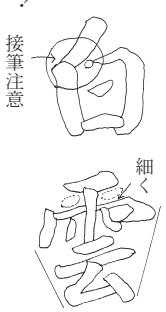
白　小さめで太く、接筆注意。

雲　冠大きく〝ム〟締めて。

抱　末画（浮鳶）のびやかに。

幽　画数多く硬くならぬよう。

石　二画目が主画、長く強く―「落款」こそ勝負！



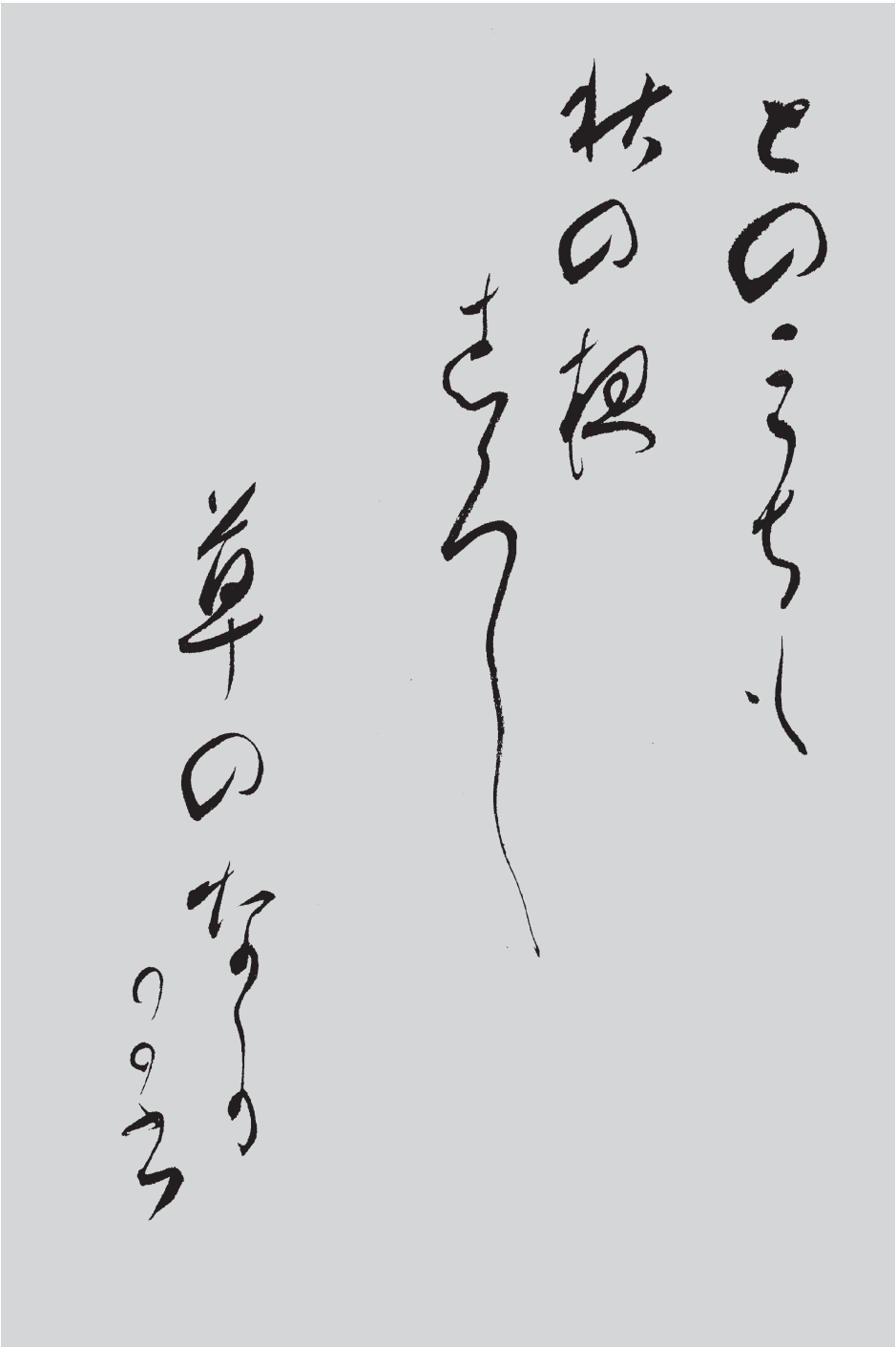
◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

どの道も秋の夜白し草のなか（水巴）

との三ちも秋の夜志ろし草のな可



〈ひとふで、ひとこと〉

初歩段階としては的確な取り組み課題。放ち書きが多く、連綿は三部分。要注意は、放ち書き部分こそ〝意連〟の大切さ。「の」同形三字、（手本本紙は筆意に相違）同形に捉われることなく、〝リズムを書く〟気持ちが大切。「関戸本」他古筆に注目、参考のこと。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

笹崎久汀先生書

晩徑黄花開有色　曉程殘月落無聲（杳爲仁）

晩徑の黄花開いて色有り、曉程の残月落ちて声無し。

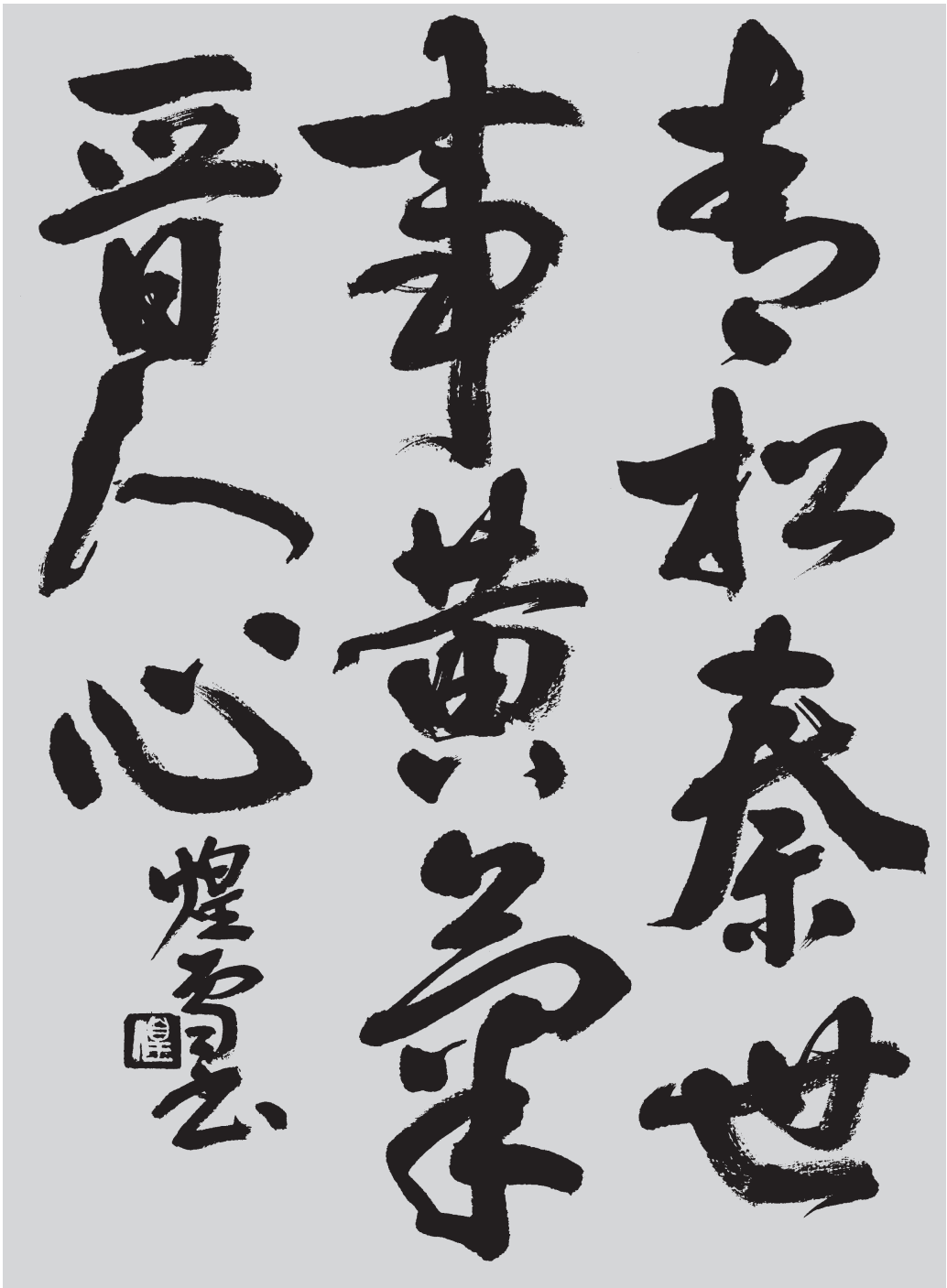
訳…夕ぐれのこみちには菊の花が黄にさいて美しく、夜明けに行く路の残月は落ちても声がせぬ。

森多富先生書

宿りせし人の形見かふぢばかまわすられがたき香にゝほひつゝ（古今和歌集　紀貫之）

宿りせし人の形見可不遅者可満王須ら連か多き香に尓本比つゝ

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。



星野煌雪先生書

青松秦世事　黄菊晋人心（王鎡）

青松秦世の事。黄菊晋人の心。

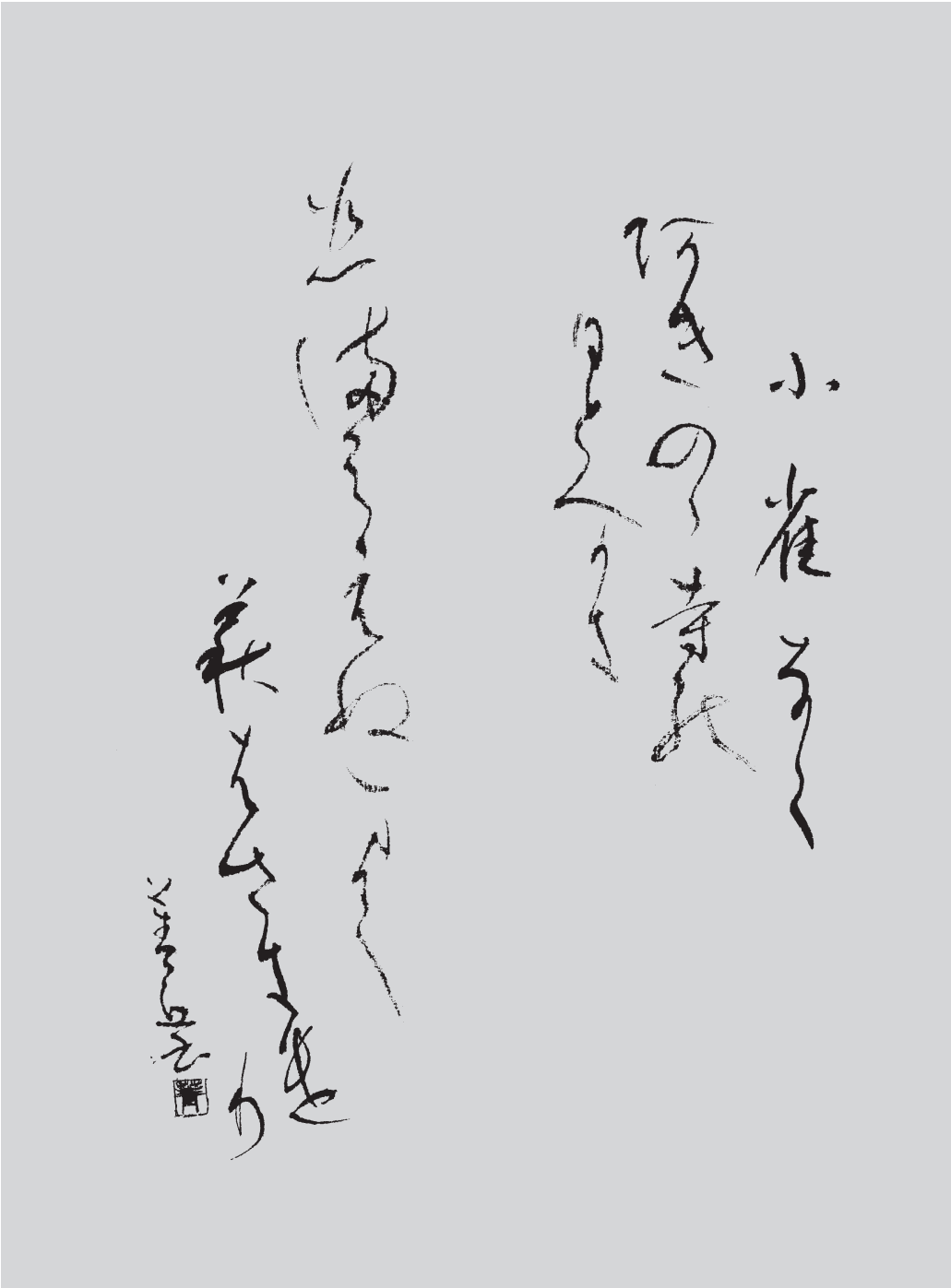
訳…松を大夫に封ぜしは秦の始皇時代の事で、菊花を愛した晋の陶淵明の心をもしのばれる。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

北島菁丘先生書

小雀なく秋の野寺のひとへ垣ひま見えぬまで萩は咲きけり（加納諸平）

小雀奈久阿きの、寺能日とへ可支悲満三えぬ万氏萩者さ支遣利

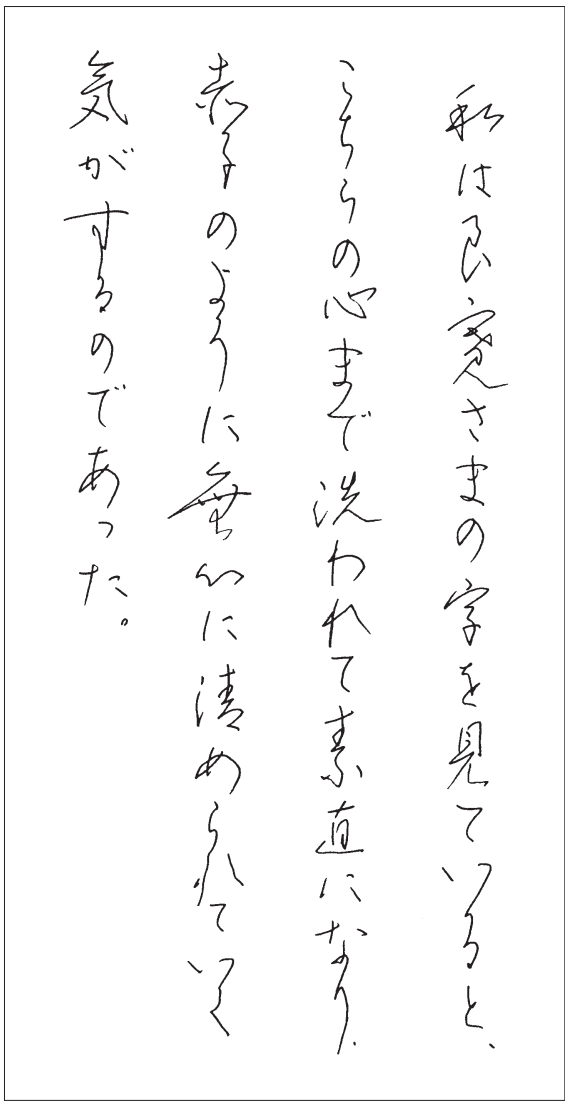


◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

石原春香先生書

課題 1　（初段以上）



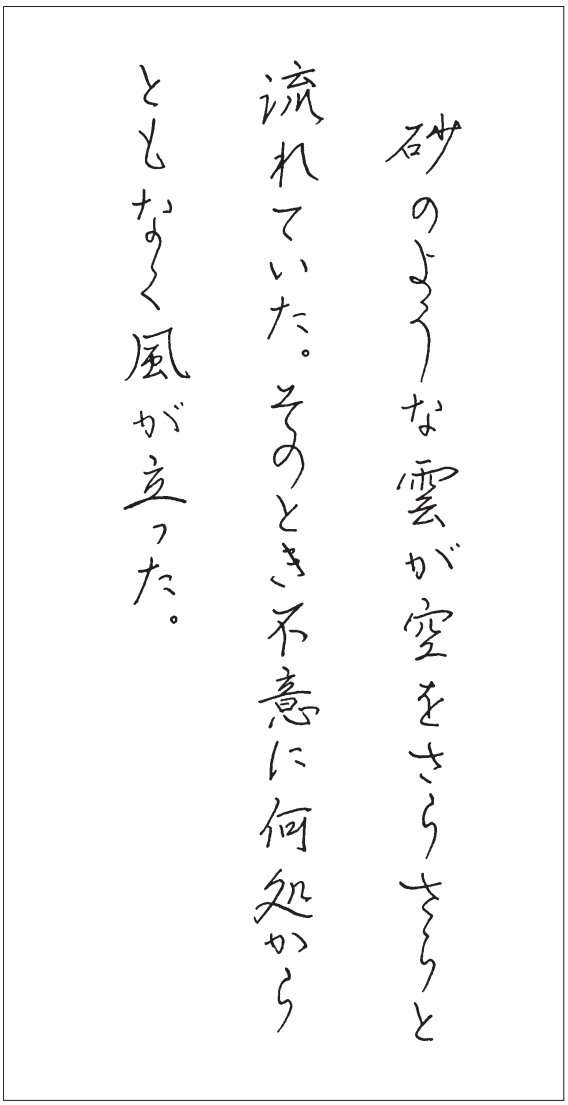
課題1（初段以上）

私は良寛さまの字を見ていると、こちらの心まで洗われて素直になり、赤子のように無心に清められていく気がするのであった。

（「手毬」　瀬戸内寂聴）

湯澤春翠先生書

課題 2　（初段格以下）



課題2（初段格以下）

砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処からともなく風が立った。

（「風立ちぬ」　堀　辰雄）

◆**注意**

(1) 自分の段級に合った課題を選択。

(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。

(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新

(5) 会員は無料・会員外は四三〇円